

加齢黄斑変性

吉村長久（執筆） 辻川明孝，大谷篤史，田村 寛（執筆協力）

京大グループから上梓されたこの本を手にとると、大型で 256 ページもあり、タイトルからイメージされる以上のボリュームに圧倒されるかもしれない。しかし、ご安心あれ。この本は、高い専門性と学術性を備えながら、眼底クリニックのマニュアル、あるいは図譜など多彩な性格を併せ持っている。一言でこの本の特徴を言い表すなら、モノグラフを教科書のオブラートで包んだ本ということができる。最初に京大グループと書いたが、実質的にはその多くが一人の著者によるものであり、この本の中に、加齢黄斑変性、そして眼底診療への著者の熱い思いが込められており、その結果としてページ数が増えたものと理解される。

本は 5 章から構成されており、第 1 章の基礎知識から始まる。ここを読むだけで、この本がいかに丁寧に書かれているかが理解できる。黄斑の定義から始まり、加齢黄斑変性の疾患概念、分類などすべてにおいて、現時点での最も妥当であろう考え方が示されている。この「考え方」は、膨大な内外の文献を渉猟したうえでの著者の意見であり、説得力があり、バランスのとれたものとなっている。このバランスの良さ、客観性を保とうという姿勢は全編で貫かれており、このような芸当は、いま流行の分担執筆本ではなし得ないことである。

加齢黄斑変性の診断に必須となった画像診断法については、欧米と日本での特に ICG へのスタンスの違いが、本疾患についての考え方がなぜ違うのかと同時に、その歴史的背景から述べられている。しかし、光干渉断層法 OCT は加齢黄斑変性の必須検査法であることは世界共通の認識である。本書では、最新のフーリエ

ドメイン OCT 画像がふんだんに使われており、これが大きな特長となっている。さらに、カラー眼底写真、FA、IA の蛍光造影写真だけでなく、模式図も多用されており、専門書でありながら、初心者にとっても眼底所見がわかりやすくなっている（写真 222 枚、色図 36 枚）。たくさんの人に眼底をわかって欲しいという著者の気持ちの現れであろう。暇なときには、この画像を眺めるだけでも楽しめる。

著者が、眼科基礎研究における大家であることは衆目の一致するところであろう。しかしこの本の内容は、優れた臨床家でもあることを如実に語っている。臨床家として膨大な臨床例を見事に料理しきっている一方、第 1、4 章では、著者が単なる臨床家と一線を画す、科学者の目を感じることができる。このような本を、一人で書ききることの凄さに、同じ畑にいるものは感服するか嫉妬するか、いずれかであろう。このような優れた教科書が世に出たことを素直に喜ぶものであり、専門医だけでなく、専門医をめざしている人たちにも是非読んでもらいたい。そして、繰り返しになるが、読み方、見方で、専門書にも図譜にも、眼底診療の手引きにもなる本であるが、この本の根底にある何かを感じ取ってもらいたい。その何かがある、希有なる本である、この本は。

埼玉医大教授・眼科学 米谷 新

●A4 頁 272 2008 年

定価 15,750 円（本体 15,000 円＋税 5%）

[ISBN978-4-260-00678-1] 医学書院刊